

スポーツボランティアサミット2015 報告書

**地域で活動するスポーツボランティアの重要性
～大規模スポーツイベント開催決定を機に
自らの地域における活動を見直す～**



開催日：2016年2月21日(日)
開催場所：港区高輪区民センター
(東京都港区高輪1-16-25高輪コミュニティーぷらざ内)

目次

1. スポーツボランティアサミット 2015 概要	1
2. プログラム内容	
(1) 挨拶	2
(2) 基調講演 「スポーツボランティアの可能性」	3
(3) 講演 「ボランティアに期待される役割と今度の取り組み」	7
(4) パネルディスカッション 「スポーツボランティアに期待される役割と今後の取り組み」	
①パネリストからの発表	11
②ディスカッション	22
(5) 総括	25

1. スポーツボランティアサミット 2015 概要

主 催: 特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク
特別共催: 公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
開 催 日: 2016年2月21日(日)
テ ー マ: 地域で活動するスポーツボランティアの重要性～大規模スポーツイベント開催決定を機に自らの地域における活動を見直す～
会 場: 港区高輪区民センター(東京都港区高輪 1-16-25 高輪コミュニティーぷらざ内)

プログラム:

13:00～ **挨拶**
小野 清子 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事長)

13:10～ **基調講演**
「スポーツボランティアの可能性」
小谷 実可子 氏 (スポーツコメンテーター)

13:45～ **講演**
「ボランティアに期待される役割と今後の取り組み」
由良 英雄 氏 (スポーツ庁 参事官(民間スポーツ担当))

〈休憩〉

14:25～ **パネルディスカッション**
「スポーツボランティアに期待される役割と今後の取り組み」
○パネリスト
泉田 和雄 氏 (市民スポーツボランティア SV2004 代表理事)
小出 利一 氏 (新町スポーツクラブ 理事長)
小上馬 広介 氏 (鎌倉市生涯スポーツ普及実行委員)
○コーディネーター
二宮 雅也 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事)

15:45～ **総括**
宇佐美 彰朗 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事)



2. プログラム

(1) 挨拶

小野 清子（日本スポーツボランティアネットワーク 理事長）

ただいまご紹介に預かりました、日本スポーツボランティアネットワーク理事長の小野でございます。

本日は、スポーツボランティアサミット 2015 に多くの皆様のご参加をいただき誠にありがとうございます。

さて、2020 年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定後、スポーツボランティアに対する社会認識は深まりつつあります。また、2020 年だけではなく、2017 年には札幌で冬季アジア大会が、そしてお隣の韓国ピョンチャンでは冬季オリンピック・パラリンピック、翌 2019 年にはラグビーワールドカップ、更に 2022 年には北京で冬季オリンピックが開かれます。大変にぎやかな行事が続いており、このように日本とアジア諸国で国際競技大会が目白押しです。このような状況をご理解いただき、その折々になんらかの形でみなさま方のボランティアとしてのお力を発揮していただけたら大変ありがたいと思っております。



日本で行われる大会だけでなく、近隣のアジア諸国で行われる大会の事前合宿の誘致を含め、各自治体の活動も活発化しておりますので、それぞれお住まいの地域の皆さまと「私たちの地元ではどのような協力ができるのか？」という視点でお考えいただけましたら、各地域が活性化するのではないのでしょうか。このような中、昨年 10 月に創設されたスポーツ庁の今後の政策におおいに期待申し上げます。

今回のテーマは「地域で活動するスポーツボランティアの重要性」です。先にも申しました通り、日本社会が大きく変革するであろう今後 5 年の間で、スポーツボランティアという言葉や活動が日本でしっかりと根を張り定着していかなければ、ものごとは成功に結びついてはいかないと思います。

本日は、スポーツコメンテーターの小谷実可子様、スポーツ庁参事官の由良英雄様、またパネルディスカッションでご登壇いただく皆様にお越しいただいております。多くの刺激を受けて、実りある日としていただきますことをお願い申し上げますとともに、わたくしから感謝とお願いを申し上げます。開会のご挨拶とさせていただきます。お忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

(2) 基調講演(要旨)

「スポーツボランティアの可能性」

小谷 実可子 氏 (スポーツコメンテーター)

ご紹介いただきました小谷実可子です。スポーツに育てられた者の一人として、日頃からボランティアとしてスポーツを支えてくださっている皆さま、これからスポーツを支えようとしてくださっている皆さまに改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます。私にとって、周囲で支えてくださるボランティアの皆さまの存在というのは本当に大きなものでした。私は選手としての経験に基づき、実際にこんなことがあった、また感じたというような事を 30 分ほどお話させていただきたいと思います。



シンクロナイズドスイミングの選手として出場した 1988 年ソウルオリンピック、それは名古屋に招致しようとしていた大会です。当時、私は出場が決定していたわけではありませんでした。それがソウルでの開催になると決まると、地元の熱い声援の中で演技をするわけではなくアウェイでの大会となるということで、心配の声が耳に入ってきました。正式に代表選手となってからは、ソウルでの戦い方を色々考えました。技術を磨くのは当たりまえの事ですが、世界中の誰にも負けない位練習をしようと、7~8 時間水中で練習をし、外国人に負けない体形を作るために約 2 時間、水中での動きを合わせるためには地上で動きが合っていなければいけないということでさらに約 2 時間、加えてどんな色のコスチュームが映えるのだろうかというようなことを考えて練習し、また演技を構成していきました。そのような中で観客からの声援は一切、期待をしていませんでした。拍手をもらえないまま演技をするのだ、と思っていました。シンクロというのは採点競技ですから、審判は技術を見て採点をするものですが、その時の会場の盛り上がりや観客の声援も加味され審判は採点を下すのです。しかし、私たちはそのような声援などのプラスアルファを一切期待していませんでした。そして、現地に入ったら自分たちのことは自分たちでしっかりやらなければいけないのだという気持ちで会場に乗り込んだのです。ところが実際に私たちシンクロチームにボランティアとしてついてくださった方は、いつも笑顔で私たちを迎えてくださり、いつも試合会場の近くの練習場まで送ってくれて、練習が終わると韓国語アクセントの強い日本語で「今日の練習はどうでしたか？何か困ったことはありませんでしたか？」というように声を掛けてくださり、私たちの練習が終わるのを楽しみに待っていてくださいました。私たちもそのボランティアの方に会うのが楽しみで練習を終えて着替えて出て行く、というような毎日でした。当初は、「応援されないオリンピックだ」と思っていたのですが、こんなにも歓迎し、応援して下さる方がいるんだ、という風に思えたときにグッと気持ちが前に向いたのです。前向きに、ポジティブに試合期間中を過ごすことができ、練習でも 300%の、これ以上はないという程の練習をしていたので、オリンピックの舞台でも緊張もプレッシャーもなく、演技をすることができました。ここで、念願だったオリンピックのメダルを取ることができ、引退してからは「私にこんな素晴らしい経験をさせてくれたオリンピックに恩返しをしたい」と思うようになり、日本オリンピック委員会、アジアオリンピック競技会、国際オリンピック委員会などの委員を務めながら、様々な国を訪れるようになったのです。1992 年バルセロナオリンピックの後引退し、それ以降は冬季のオリンピックも訪れています。

最初に行ったのが、1994年のリレハンメルオリンピックです。ノルウェーの人達は本当に温厚で優しくかったです。そのときはテレビの仕事で訪れていましたが、テレビ局が独自にお願いしている地元のボランティアの人たちがついてくれました。テレビの仕事は待ち時間が長いです。試合のあと、会場の外で選手が出てくるのを何十分も待つのですが、リレハンメルですから気温はもちろん氷点下です。何十分後かに選手が出てくるまでずっと待っているのですが、そのボランティアの青年と一緒に待っていてくれて、「いいんですよ。待つのが仕事だとわかっていますから」と言ってくれ、インタビューを終えて車に戻ると暖かいスープを用意してくれていました。現地の人々の温厚さや優しさに加えて、もう一つ学ぶことができました。日本のスキージャンプチームがあと一步というところでメダルを逃してしまった時の事です。スキージャンプに対して目の肥えた現地の観客の皆さんは、飛び出した瞬間のフォームや飛び出しの方向などでジャンパーの失敗を感じてしまい「ああ〜」とどよめいたのです。選手自身は飛び出した時にうまくいったのか、失敗だったのか感じると思います。それでも観客の大歓声の中で飛ぶことができたらなんと素晴らしいことかと思いました。こうしてリレハンメルで観客がそれぞれの競技のことを良く理解し、選手の力になる応援をすることは、なんとすばらしいのだろうか、ということ学びました。

1996年のアトランタオリンピックで印象に残っているのは、とても残念なことです。解説や実況が自国選手の対戦相手が失敗するとそれを喜ぶような反応が見受けられたことです。しかし、オリンピックの日程が進んでいくにつれ「それはフェアじゃないのではないか」、というような不満の声、異議を唱える声が聞かれるようになっていったのです。ある日、メディアとして取材に行ったときに会場のボランティアの方に「どこに座ったらいいですか？」と聞くと、「そこに座ってください」と言われ座っていると、他の人がきて「そこじゃない、あちらに移動してください」というようなことを言われ、何度か移動した後、「どこでもいいから、座る場所を決めてください。」と言いましたら、それらのボランティアから「わたしたちは所詮ボランティアだから」と言って投げ出されてしまい、とても残念に思ったことがありました。しかし、最後にすばらしいことがありました。男子陸上のスーパースター、マイケル・ジョンソン選手の世界記録更新が期待された200メートル決勝です。会場を埋め尽くす大観衆が、マイケル・ジョンソンに注目しました。そして、偉大な世界新記録が出た瞬間、それまで全く知らなかった人同士、国も、人種も、文化も違う人同士が一体となり、偉大な記録がでたことを喜び合い、互いが隣合わせたこと、ともに喜びあうことができたことに感謝して、親しみと連帯感が生まれ、すばらしい一瞬を経験することが出来たのだらうと思い、「オリンピックってすごいなあ」とあらためて感じました。私はそれまで、すばらしい演技をしてメダルを取ることがずっと目標で夢でしたけれども、それをこうして支えてくれる人達もこんなに素敵な思いができることに気づきました。でもそれがなしえたのは、最高の状態で競技に臨むことができるように努力してきたマイケル・ジョンソンはもちろんのこと、一緒にレースを戦った他の選手達もいたからで、そして滞りなくレースができたのは、準備を重ねた競技役員の人たちがいたからであり、それを支えるボランティアがいたからであって、そして観客がいたからです。みんなの努力が一つになったからこそ出来上がった瞬間であって、素晴らしいなあとあらためて感じることができました。

次は、1998年地元長野です。私は招致活動から関わらせていただいて、開催が決定したあとも近くで見せていただいておりましたので、世界の人々がどのようにこの大会を楽しむのだろうと期待しておりました。当時、会場に向かうバスの中である外国の方が「あのリンゴみた？リンゴにWELCOMEと書いてあったよ」と話していたのです。そういうことに外国の方々には感動されるのだな、ということを感じて大変うれしくなりました。長野のときには、もちろん「素晴らしかったね」というような賛辞の言葉をたくさん耳にしたのですが、今後のためにもネガティブなエピソードもお伝えしておきますと、「日本の人はなんでも笑顔でYESといってしまう」「なんでもOK,OKと言ってしまうと、あとでやっぱりできない、というようなことになってしまったり混乱してしまう」、というようなこともよく耳にしましたので、できないことはできないとはっきり言うことも大切なことだと思います。英語のYES、NOと日本語のはい、



いいえは話の内容によっては、常に一緒ではないということも気を付ける必要があります。

そのあとは、2000年のシドニーオリンピック。これは私の中でとても素敵な思い出があります。地元の選手にイアン・ソープという競泳の選手がいて大スターでした。地元の人に話を聞きますと、「イアン・ソープが素晴らしいのは、水泳が速いだけではなく、人として素晴らしいのだ」ということでした。彼は、色々な活動を通じて社会貢献し、それが認め

られてスーパースターになったのであって、オーストラリアでは競技が強いだけでは評価されないのだよ、という話を聞きました。私は、その大会のとき聖火ランナーをさせていただいていました。私は、一オリンピックとして、シドニーの静かな街のコースを走らせていただきました。すると、コースの両サイドには沢山の木々が立っていたのですが、その木の上から足をぶらぶらとさせながら声援を送ってくれる人が大勢いて、ゴールをすると木から降りてきて、サインを求めてくるのです。それは日本などでも見られる光景ですが、その小学生くらいの子供達はサインを求める前に「ソウルオリンピックでの銅メダルおめでとうございます。今回、私たちの地元で聖火リレーを走ってくれてありがとうございます。ぜひ記念にサインをしてください。」と言うのです。聖火リレーを走る選手の背景を勉強するよう学校で指導があったのか、あるいは家庭でそのように教えられたのか、そこはわかりませんが、ただオリンピックが走ってそれで終わりということではなく、選手の背景や功績をよく知った上でサインを求めて来る子供たち。そんなシドニーオリンピックでしたので、あのような素晴らしい大会になったのではないかと思います。

近年ではロンドンのオリンピックも素晴らしかったですね。ロンドンでは観客の人達が心のままに拍手をしたり声援を送ったりしたので、とても温かな雰囲気の中で競技が行われました。ロンドンでは、ミュージカル鑑賞に行きましたが、その会場でも同じような光景を目にし、「ロンドンの人達は日頃からこうした良いものを目にすることで、感動したりすばらしいと思ったりしたことには、心のままに声援を送ることが根付いているのだな」というようなことも学びました。それよりなにより感動したのは、陸上のメインスタジアムの外にいた老夫婦です。メインスタジアムのある駅をおりて、スタジアムに向かうと、「ウェルカム！これから見に行くのですね。エンジョイ！」「この競技はあちらです。これはあちらです」とうように誘導してくれた老夫婦がいらっしゃいました。「ご夫婦ですか」と尋ねると、赤の他人です、と。しかし、本当に夫婦に見えるほど息が合っていて、「私たちは、オリンピックを見に世界中から楽しみに来た人たちのうれしそうな笑顔を見るのが何よりのオリンピックなのです。それで十分なのです。」と言ったのを聞いて、素敵だなと感動いたしました。翌年に、2020年のオリンピック・パラリンピック開催地が決まるという招致活動の最中でしたので、もし、東京に決まったならば、私たちもあのようにして、ウェルカム！と笑顔でお客様をお迎えできるようになれたらいいな、と思ったものでした。

最後になりましたが、2020年のオリンピック・パラリンピックが決まった経緯を少しお話します。最終決定したブエノスアイレスのことをお話しますと、安倍総理大臣を始めとし、政界、財界、スポーツ界、などあらゆるトップの方々が一堂に会し肩書を忘れ、チーム一丸となってぎりぎりまでプレゼンの練習をされていました。高円宮久子妃殿下もお越しくださり、復興支援の感謝のお言葉を述べられるなどしてくださいました。もしこれで決まらなかったら日本にオリンピック・パラリンピックがくることはもうないだろうと思うほどのエネルギーを感じました。東京のチーム力を間近に見て、多くの人達が思いを同じにして頑張れば、こんなにも素晴らしいエネルギーが生まれるということを体験したことが、私にとっ

ては最高の経験となりました。選手たちは開催が決まったことで、楽しみというよりも、リオでの経験を踏まえていかに2020年の大会で良い成績を収め、メダルを取るかということに非常に期待が膨らんでいます。シンクロ競技についてお話をすると、もともとシンクロが強かった日本は地元開催でメダルを取らないわけにはいかない、ということで、シンクロ界も皆が力を合わせていかなければならない、今まで卒業していった選手達が試合に出て来るようになって、大会を支えているのです。とにかく強くならなければいけない、ということで力を合わせるようになったシンクロ界は、去年の世界大会で、8大会ぶりにメダルを勝ち取ることができました。この勢いで、リオでもメダルを目指していきます。それまで、メダル常連だったシンクロですが、ロンドンでメダルを逃すという悔しい思いがある中で、メダル奪還に向けてプレオリンピックに2日前に出発しました。そんな風にして、それぞれの競技の選手、コーチ、競技役員たちが頑張っています。それを支えてくださるのは、皆さんです。ブエノスアイレスで、招致に関わった一人ひとりがすばらしいエネルギーを生んだ、これを今度は2020年の大会を成功させようという思いを一つにして、それぞれの立場の人たちが同じ思いに向かって力を一つにしたら、どれだけすばらしいオリンピック・パラリンピックになることでしょうか。私は今でも、キムチの匂いを嗅いだり、韓国語アクセントの日本語を聞いたりすると震えます。あの素晴らしい思い出をくれたソウルを思い出すからです。それと同じように、何十年たっても東京タワーを見るたびに、「東京オリンピック・パラリンピックはなんて素晴らしかったんだろう」と思いを馳せる人たちが世界中に広がりますように、ぜひ皆さまのお力をお借りしたいと思います。これからもどうぞよろしくお願い致します。頑張ってください！

(3)講演(要旨)

「ボランティアに期待される役割と今後の取り組み」

由良 英雄 氏 (スポーツ庁 参事官 (民間スポーツ担当))

ご紹介いただきましたスポーツ庁の由良でございます。ご紹介いただきましたように、昨年10月のスポーツ庁立ち上げに伴い、新しい取り組みを色々とさせていただいております。公務員になって20年以上になりますが、これまで新潟県で中小企業振興の仕事や日本魅力発信プロジェクト、最近では中小企業の海外進出関連の仕事などをしていました。そんな関係で、スポーツ庁の中でも民間スポーツを担当する部署で仕事をしております。



平成23年制定のスポーツ基本法をきっかけに、スポーツ庁が平成27年10月にできました。それ以前はスポーツについては文部科学省にスポーツ局がありいろんな取り組みをしてきましたが、独立させて新しい風のなかでスポーツ行政に取り組んでいこうじゃないかということになったわけです。さらに平成25年にオリンピック・パラリンピック大会が東京で開催されることが決定したというのも大きなきっかけになっております。初代長官には鈴木大地氏が就任しました。

ご存知のように、オリンピック・パラリンピックの大会自体は組織委員会が運営組織ですが、スポーツ庁としての取り組みはオリンピック・パラリンピックのみならず、健康スポーツ課もありますし地域振興の担当の参事官もいます。私自身は民間スポーツ担当の参事官ですが、こういったところ実はこれまで文部科学省では取り組めていなかった分野だと思っています。長官自身は健康スポーツ課という役割に注目しております。鈴木長官は順天堂大学でスポーツ医学の研究をされています。スポーツと健康の関係、これは当たり前のよう皆さん思っていますが、実はスポーツをすると健康になる、長生きをすると誰もはっきり証明していない。ですがスポーツを続けることで健康になっていこうと勧めていきたいということです。そういった活動をしていくときに、どこか元気がでない、そういった時に鈴木長官や小谷氏などオリンピックの方々やプロスポーツ選手が現場に行かれて活気づけるなどありますと大変ありがたい存在なわけです。そういった活動を通じて、スポーツで健康づくりをするという取り組みは一步進んでいくと思っております。一つ一つのイベント、あるいは活動を展開していくのもスポーツ庁の役割ですし、そういった動きを作っていく時にボランティアの力を貸していただく、企業のお力を活用させていただく、また行政側も特に地域の行政の方にリードを取っていただくなど、一つずつ積み重ねて作っていかねければと思っております。

それから国際課があります。例えばラグビーのワールドカップを日本で招致をして2019年に開催しますが、そういった招致の活動をスポーツ庁あるいは文部科学省、国として展開をしていくことを担当としております。直近でも2021年に福岡で世界水泳が開催されることになりました。この間ブタペストで鈴木長官、小谷氏も一緒に現地に行って国として招致活動をしました。国際大会を招致するには必ず、オリンピック・パラリンピックもそうですが地域で国際大会を開催しようとする、関係の行政機関、特に都道府県の取り組みが大変重要になります。スポーツ庁ができのだからもう一步踏み込んで、失敗を恐れずに実現に向けて国もリスクを取って展開していこうというスタンスは改善点の一つとして進めていきたいと考えます。

もう一つの大きな仕事が、国際スポーツ団体、国際水泳連盟とか国際体操連盟など IOC の関連団体ですけれども、そういった国際競技団体に日本人の役員に就任してもらう国際競技団体への役員倍増計画という取り組みも進めていまして、それぞれの競技団体に委ねるだけでは実現が難しいところを国として例えば外務省とか、JOC などに協力していただいて進めようと。これは日本だけでなくイギリスのスポーツ庁にあたる組織もイギリスのスポーツ関係者が国際競技団体の役員を務め、サポートする活動をしています。こういう取り組みが日本のスポーツ界の地位を高め、海外からスポーツ大会の招致をしていくとき力を発揮するのではないかということで、展開しております。

一方で、地域担当の参事官がおりまして、これは農林水産省からこられた参事官ですが、地域の中でも農村地域も含めたいろんな地域でスポーツの取り組みをしていこう、典型としてマラソン大会がいろんな地域で開催され、地域活性化に繋げる、そういった取り組みです。例えば、福島で健康づくりスポーツ国際大会があります。また、オリンピックの時には福島で合宿をしてはどうか、あるいは試合の一部を福島でやったらどうかというような提案を皆さんと話をしています。そういった新しい地域の活性化をスポーツ中心にやっていこうではないかというのもスポーツ庁の取り組みです。鈴木長官も週末から福岡、徳島と回り、いろんなところでスポーツ庁の活動を説明しています。

私が担当の民間スポーツ、いわゆる、プロスポーツの J リーグのサッカーチームをもとに想定している部門です。スポーツビジネス全般をみるとアシックス等のスポーツ用品企業もありますし、ルネッサンス、コナミといったスポーツフィットネスのジャンルもあります。冒頭申し上げたようにプロスポーツのチームの地域活性化の起爆剤としての役割を意識していきたいなと思っているところです。鈴木長官が「スポーツビジネスの最先端を見に行く。地域の活性化にとってこんなに参考にしなきゃいけないものはない」とスーパーボウルの見学に行かれました。ビジネスとして成功し、それが地域の活性化に貢献しているのがとてもわかりやすい。スーパーボウルを見に行くということで、1週間前からイベントを楽しみ、家族で楽しみに行くそうです。またアメリカの大学がどのようにスポーツに取り組んでいるか、IT 企業などは地域との繋がりの中でどうスポーツを取り入れているかなど勉強してきました。我々も人と人を繋げるシステムを提供している IT 企業との協働も必要だと考えています。スポーツイベントを開催するとき、あるいはスポーツ団体を運営するとき、必ず必要となってくる人と人の繋がりをサポートするビジネスとして、そういったスポーツ IT サービスが始まっていくだろうと考えます。スポーツ庁の新しい組織体系の働きをご紹介しましたが、新しい 4 本の柱として取り組みを開始したところです。私自身はスポーツビジネスの担当ということで、スポーツがビジネスとしてどう展開していくべきかというのを追求していきたい考えです。

スポーツがビジネスとして成立するという事は、スポーツをとりまく環境が充実していく、それを通じてスポーツに取り組む人口が増えいわゆるスポーツ実施率上昇ですとか、見るスポーツを楽しむ人が増えていくというように循環していくことが大切だと思っております。そういった取り組みの中で、金銭として絡む部分もありますし、任意で寄付ですとかボランティアですとか、あるいはサービスを提供していただくという事もスポーツビジネスを運用していくために不可欠な要素だと思っております。先日、ガンバ大阪のスタジアム落成式がありました。140 億円のうち 110 億円が寄付で、ほとんどの必要な金額が寄付でまかなわれたというのは新しい時代を作っていく流れではなかるうかと感じました。これまで国や自治体が費用を負担するというのが常識でしたが、これからもそれが中心になるのか、そうでないのか、スポーツに貢献できる新しい動きではないかと思っています。

今日はスポーツ庁の成り立ちからスポーツ行政組織、注目分野などお話しさせていただきました。皆さま、ご静聴いただきありがとうございました。

ボランティアに期待される役割と今後の取組



スポーツ庁創設の経緯

2013年 文部科学省「スポーツ振興戦略」の策定
 ○スポーツ振興戦略「スポーツ振興戦略」の策定
 ○スポーツ振興戦略「スポーツ振興戦略」の策定
 ○スポーツ振興戦略「スポーツ振興戦略」の策定

2014年 閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定

2015年 閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定

2016年 閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定

2017年 閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定
 ○閣内閣外スポーツ関係者による「スポーツ振興戦略」の策定

スポーツ庁の組織概要

スポーツ庁は、スポーツ基本法の趣旨を踏まえ、国際競技力の向上はもとより、スポーツによる健康増進、地域・経済の活性化、国際貢献など、スポーツ行政を総合的・一体的に推進するため、文部科学省の外局として設置された組織。

スポーツ庁 (独立行政法人)

- 長官
- 次官
- 審議官
- スポーツ振興官
- スポーツ審議官

課

- 企画課
- 健康スポーツ課
- 競技スポーツ課
- 国際課
- オリンピック・パラリンピック課 (臨時)
- 事業室 (地域連携推進室)
- 事業室 (国際スポーツ推進室)

部

- 中央教育審議会 (学務部・学務課)
- 高等学級 (スポーツ・健康室 (課長室) (臨時))
- 文部科学省外局として設置
 - 国際課
 - スポーツ振興課
 - 学務部

スポーツ庁において取り組む主な課題

1. **国際競技力の向上**
 ○国際競技力の向上
 ○国際競技力の向上

2. **健康増進・地域・経済の活性化**
 ○健康増進・地域・経済の活性化
 ○健康増進・地域・経済の活性化

3. **国際貢献**
 ○国際貢献
 ○国際貢献

4. **オリンピック・パラリンピックの推進**
 ○オリンピック・パラリンピックの推進
 ○オリンピック・パラリンピックの推進

スポーツ環境の充実に向けて

●スポーツによる健康増進
 ●スポーツを通じた地域活性化・国際貢献の促進 等

●新たなスポーツのニーズの創出
 ●スポーツを通じた健康増進・国際貢献の促進 等

●アスリート層
 ●スポーツの普及・振興
 ●国際貢献・文化・経済・社会
 ●国際貢献・文化・経済・社会

スポーツ基本計画(抜粋)

今後10年間を見通したスポーツ推進の基本方針

スポーツを実際に「する人」だけではなく、トップレベルの競技大会やプロスポーツの観戦等スポーツを「観る人」、そして指導者やスポーツボランティアといった「支える(育てる)人」にも着目し、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境を整えるものとする。

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた政府の方針

2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針 (平成27年11月27日閣議決定)【抜粋】

⑦ 教育・国際貢献等によるオリンピック・パラリンピックムーブメントの普及、ボランティア等の機運醸成

全国でより多くの方々が大会に関連した取組に関わっていくことができるよう、大会の運営や地方における海外からの来訪者の受け入れなどの各種ボランティア活動、大会に関連する取組に係る寄附等への機運醸成を図る。

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

オリパラ教育の必要性

- 2020年まで5年を切るなか、大会に向けた盛り上げ・着手する必要がある。特にパラリンピックへの関心向上が課題。
- オリパラ教育は、大会そのものの興味関心の向上だけでなく、スポーツの価値への理解を深めるとともに、規範意識の涵養、国際・異文化理解、共生社会への理解にもつながる多面的な教育的価値を持つ。
- 我が国の無形のレガシーとして、オリパラ教育の全国展開が必要。

課題

- 地域によってオリパラ教育に対する関心や格差、オリパラに関する情報や教育資源にも差がある。
- 意欲的な教育機関や企業、NPO、競技団体等もあるが、効果的なマッチングに課題。
- 2020年以降も見据え、継続的・組織的に取り組んでいく体制が脆弱。

中核地点

- 全国各地に、地域の教育機関、民間団体等を巻き込んだ**オリパラ・ムーブメント推進コンソーシアムを形成**。
- オリパラ教育に関する専門的な知見・実績を有する大学等を中核地点として、各地域のコンソーシアムを支援。
- 各地域で、**オリンピック・パラリンピックとの交流、市民セミナー、オリンピック・パラリンピック推進校等**の取組を推進。(地域のスポーツ・国際交流・文化活動と連携。)
- 各地のコンソーシアムをネットワーク化した**全国コンソーシアムを形成**。
 →効果的な教育手法開発、指導者養成、先進事例共有等を図り、地域の活動を促進。

アウトカム

- 大会(特にパラリンピック)の観客・ボランティア動員や全国各地における気運醸成、事前キャンプ誘致に貢献。
- 児童生徒への多様な教育効果の発揮、学生のキャリア意識の向上、高齢者の生きがいづくりの活動の促進、地域の世代間交流、地域スポーツ活動の活性化

地域における障害者スポーツ普及促進事業

趣旨
2020年オリンピック・パラリンピック東京大会を成功に導き、全国各地で障害の有無に関わらずスポーツを行うことができる社会を実現するため、国が、各地域において障害者スポーツに取り組みやすい環境の整備を促進する。

事業内容
1. 地域における障害者のスポーツ参加促進に関する実践研究 （関係官庁・自治体）への委託事業
○ 都道府県・政令市において、域内の障害者スポーツ普及のための体制づくりやノウハウ作成に関する実践研究を実施。

目

- 障害者スポーツ振興体制（文科省、厚生省、中核行政機関との連携）
- 有識者会議
- 地域における障害者スポーツの普及・促進に必要な方策について検討

連携関係

- 都道府県・政令市
- 障害者スポーツ振興体制（都道府県）
- 障害者スポーツ振興体制（政令市）
- 障害者スポーツ振興体制（民間団体）

域内

- 障害者スポーツ振興体制
- 障害者スポーツ振興体制
- 域内への普及
- 身近な地域における障害者スポーツ環境の整備

スポーツ関係者と障害者団体等が、各地域で連携・協働体制構築し、障害の有無に関わらずスポーツの参加機会を確保し、社会の実現にも寄与。

※平成27年度は品川区が本事業の委託先の1つとなっている。その中において、びわこ成蹊スポーツ大学が障害者スポーツのボランティア養成実践事業を実施。

2. 障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究 （民間団体への委託事業）
○ 障害者のスポーツ参加の阻害要因を障害種や程度別に把握・分析する専門的な調査研究を実施。

スポーツボランティア活動の内容

年間の活動状況については、「日常的な活動」の「スポーツ指導」(平均36.7回)が最も多く、次いで「団体・クラブの運営や世話」(平均35.0回)、「スポーツ施設の管理や手伝い」(平均19.2回)と続き、スポーツボランティアは日常的なスポーツ活動に広く参加している。

スポーツボランティア活動の内容		実施率 <small>(%)</small>	実施回数 <small>(回/年)</small>
日常的な活動	スポーツの指導	31.2	36.7
	スポーツの審判	27.9	10.7
	団体・クラブの運営や世話	34.4	35.0
	スポーツ施設の管理や手伝い	9.1	19.2
地域のスポーツイベント	スポーツの審判	22.1	5.6
	大会・イベントの運営や世話	53.2	4.5
全国・国際的スポーツイベント	スポーツの審判	2.6	2.8
	大会・イベントの運営や世話	7.8	1.8

※1 過去3年間、同じ内容のボランティア活動を行ったことのある人は2015年10月現在、約7割の割合で調査対象者。
※2 該当する種類の活動内容の割合。その調査数から算出。
（出典）厚生労働省「ボランティア活動に関する調査結果」

(4)パネルディスカッション(要旨)

コーディネーター

二宮 雅也 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事)

皆さん、こんにちは。これからの時間は、実際に地域の中でスポーツボランティアを实践されている方や活動をコーディネートしている立場の方にお話を伺う形で進めてまいりたいと思います。

今日の午前中、東京都体育協会が主催するスポーツ少年団のリーダー講習会に行ってきたのですが、1964年の聖火ランナーを経験した方のお話を伺ったり、参加者とグループワークをする時間があり、一番下は10歳から上が74歳までの参加者が世代の垣根を超えてスポーツやオリンピックという共通のテーマで交流できるという魅力がスポーツボランティアにはあるということに改めて感じました。



それでは、パネリストの皆さんからそれぞれの活動の現場での具体的な取り組みと、今後期待する役割についてお話ししていただきたいと思います。

① パネリストからの発表

泉田 和雄 氏 (市民スポーツボランティア SV2004 代表理事)

皆さん、こんにちは。仙台からきました泉田です。私どもの団体は、市民でつくるスポーツボランティアということで市民スポーツボランティアSV2004と名乗っています。私自身はサッカーJリーグのベガルタ仙台のスポーツボランティアとして1998年にスタートし、これまで20年近く活動しています。宮城国体、サッカーワールドカップといった大型スポーツイベントが宮城で開催された時に一緒に活動したボランティアの仲間と、単一の種目ではなくいろいろなスポーツイベントを支えていこうという団体です。



特色は、市民だけで作り自由に自分たちで話し合っ活動を組み立ててきた点です。その分、楽しさも自分達で作るということでやってきました。2005年にはプロ野球の楽天イーグルスができ、バスケットbjリーグの仙台89ERSもできましたので、そのボランティアの立ち上げから活動に携わっています。年間を通じて約1000名のボランティアが活動していますが、このように横でつながって活動している地域はまだ多くはないと思います。活動内容は、依頼された様々なスポーツイベントに事務局をつくってサポートしたり、レベルアップをしていくための研修を企画したり、またリサイクルを含めたごみの問題にも取り組んでいます。また、一人ひとりのボランティア、一つの団体では力はありませんが、交流をすることで改善していければということで、様々な個人や団体とネットワークをつくって交流してきました。また、スポーツのボランティア活動というのはなかなか記録として残されていきませんが、アンケートや活動記録を残していこうという活動もしてきました。

役割と主な活動としては、ボランティアのイベントそのものは宮城でも増えている中で、活動についての理解が主催者側がない場合があるので、活動についてアドバイスをしたり、募集から終わったあとの改善報告までのまとめも一緒に行っています。より良いイベントをともに創るという点ではどのようなイベントでも共通しています。お客様に楽しんでいただき、自分たちボランティアも楽しめるような活動にしてきました。昨年場合は、女子バレーのワールドカップや大相撲仙台場所もボランティアとして活動させていただきました。

市民組織としてのメリットは自由度が高いことで、原則的にボランティア自身も楽しめるようにということで活動してきました。しかし、今後はイベントが大型化し、イベント数が増えてくると継続性という面で課題を感じています。様々なイベント会場で起きることは社会の縮図ではないかと思っています。例えば楽天イーグルスでは1ゲームあたり2万1千人ほどの観客が集まります。その中では、環境問題や交通問題も起きますし、観客の中には高齢者、子ども、障害をお持ちの方など、様々な方がいます。社会で起きるのと同じような問題がイベント会場でも起きるということです。エコについては環境NGOと連携して問題解決に当たっています。これまでのところ活動エリアは仙台が中心で、相談を受けたり、持ち込まれたりしたことに対応することが多かったように思います。

人材が活動のキーですが、継続していかなければ信頼関係そのものを築けませんので、新たな取り組みを始めています。例えば、ボランティアマッチングという取り組みですが、仙台国際ハーフマラソンでは大体1300名位のボランティアが活動をします。一般のボランティアも200名位が参加されます。そうした方々がその大会一日で終わるのではなく、その後も参加していただけるようボランティア組織との出会いの場を設けていて、昨年一日だけで延べ50名の登録をいただきました。また、一昨年からはじめたのが中高生ボランティア育成講座です。最初は文部科学省のモデル事業としてやらせていただいたのですが、2020年には宮城スタジアムもオリンピックのサッカー会場になるので、中高生にもボランティアを体験していただいています。決してハードルは低くないのですが、つい先日修了式があり44名の中高生が修了しました。これから先の夢としては、その中からリーダーが生まれてくることです。

スポーツ組織を横につなぐスポーツ庁が生まれたことや、2020年前後に大型スポーツイベントが続くということで、ボランティアへの関心が否応なく高まるのではないかと思います。そこで生まれたボランティアがぜひ先につながるものにしたいというのが切実な課題です。また仙台にはスポーツコミッションという横につなぐ団体が生まれ、今年4月には文化観光局の中にスポーツ分野が位置づけられることになったようです。今後は横につながる動きが加速して、ボランティアが地域や街をともに創る時代がくるのではないかと、そうなってほしいなと思っています。

スポーツが何のためにあるのかというと、そこに住む人たちのためでなくてはならないと思います。地域に根ざしてボランティアと主催側が双方向で連携し発展していくことを目指して、ともに取り組む意識が大切だと思います。例えば、障害者分野では全国で様々な団体が連携していて参考になる部分も多々ありますが、情報がなかなか伝わってきません。私たちも学びながら試行錯誤しながらやっているところですが、地域として発展するにはスポーツがスポーツ団体だけでつながっているのでは難しいと思います。障害をお持ちの方のケアを十分にするためには、障害の分野に詳しい団体との連携が大事だと思っています。仙台でも総合型スポーツクラブとのよい関係を模索し始めていますし、また、仙台の特色として音楽のイベントや地域のお祭りにスポーツボランティアが積極的に出ていくという動きも

関わってきており、地域の連携の一つの切り口としてボランティアが役に立つのではないかと考えています。これまでが受け身であったのに対し、より積極的な姿勢で臨めればと思います。



人材育成の部分では、「楽しむ」ということが難しくなっていると感じています。自分だけが楽しいのではだめで、いかにまわりと一緒に楽しめるようにするかが課題だと思っています。また、リーダー、コーディネーターが主催者とどういい関係をつくることができるかということも大切です。ボランティアが単に無償の労働力になってしまっただけではいけないと思います。もちろん、そのような側面はありますが、スポーツボランティアの本質を理解してくれるような働きかけを運営側にしていく役割の人がこれからも全国に求められていくのだらうと思います。専門性や資質を活かした活動や、研修・学びの場に対してはなるべく負担なく体験できるようにするなど、少しでもボランティアがサポートを受けられる時代になっていけばと思っています。

最後に、ボランティアには人と人、組織と組織をつなぐ力があると思うので、それぞれが夢をもって、自分たちの力でつながってより良い活動ができればと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。有難うございました。

- 二宮：仙台はプロチームが多く、携わることのできる資源が多いのがすばらしいところですが、SV2004に所属している人はどんなライフスタイルになっていますか？
- 泉田：年間を通じて活動する人が多いのがうちの会員の特色です。いろんな方が参加していますが、スポーツボランティアがあっただけよかったと言ってももらう機会が最近増えていきます。スポーツボランティアがなければ自宅にいて誰とも話さず、出かける機会もなかったかもしれないというおばあちゃんがいるたり、若い人でもスポーツボランティアで体験したことがこの先にも役立つだろうと言ってくれたりします。幅広く体験することでいろんな気づきがあり、いいものを互いに紹介し合うという機会が増えてきたことは非常に幸せなことだと思っています。

スポーツボランティアサミット 2015

スポーツボランティアに期待される役割と今後の取組



市民スポーツボランティア SV2004
代表理事 泉田 和雄
2016年2月21日(日)

<http://sv2004.jmdo.com/>

市民スポーツボランティアSV2004 設立の流れ

仙台・宮城は
スポーツボランティアの元気な地域です

98年 ベガルタ仙台ボランティア	2005年 楽天イーグルスボランティア
2001年 みやぎ国体ボランティア	2005年 89ERSボランティア
2002年 ワールドカップボランティア	2012年 仙台ベルフィーユボランティア
2003年 グランディ21ボランティア	
2004年 SV2004発足	

年間を通じて
約1,000人が
活動している地域

そんなまちは全国多くはありません

主な活動内容

- 活動① スポーツのネットワークを通じて
依頼される活動への参加【支える活動】
- 活動② ボランティアのレベルアップ
のための活動を企画運営【研修】
- 活動③ 活動する環境をより良いもの
快適なものにする活動【エコ活動と改善】
- 活動④ 同じ活動をする仲間との交流を楽しんで
います【交流】
- 活動⑤ 記録し残すための活動
→ いつか誰かの役に立つ【情報発信】

役割りと主な活動実績

スポーツボランティア全体についての**アドバイス**
スポーツボランティアの**まとめ役**(募集から改善まで)
より**良いイベント**をともに**創る**

2005年 楽天イーグルスボランティア09ち上げ	2012年 U-20ワールドカップサポート
仙台国体ボランティア09ち上げ	暮らしんびっくサポート
2006年 宮内バスケットボール選手会サポート	日本スポーツボランティア協会サポート
2007年 フォクシーオールスターゲームサポート	仙台ベルフィーユボランティア09ち上げ
2008年 日本女子ソフトボール選手会仙台地区対抗戦	サッカー日本代表観戦サポート
2009年 仙台リーグ・オールスターゲームサポート	楽天イーグルス選手会09ち上げサポート
2010年 新日本大観戦	東北電力リーグサポート
JOCニッポンびっくサポート	中絶はスポーツボランティアが救済活動開始
東北国体選手会スポーツイベント主催	2015年 ワールドカップ女子バレーボールサポート
仙台東北スポーツボランティアサミット	大船渡地区の観戦サポート

市民組織としての課題

メリット	即断即決の行動力 創意工夫 = 知る楽しさ 枠を越えた連携や活動 ボランティア・ファースト(楽しく活動)を大切に	高い自由度
デメリット	認知や関係作りに時間がかかる 拠点がなく、基盤が弱い 事務局の負担が大きい	継続性に課題

「地域連携」と「人材育成」が必要

これまでの取り組み

地域連携	エコを中心とした環境取り組み(NGO連携) イベント主催による認知アップ 研修及び講演活動
ゆや受け	プロスポーツ・単発イベント主催のサポート 仙台中心
人材育成	初心者向けのボランティア・マッチング企画 中高生スポーツボランティア育成講座 テーマごとのサポートメンバー活動 開いて学ぶ運作(リレートーク等)

スポーツ界の変動

<全国>

- ・スポーツを横断的につなぐ「スポーツ庁」誕生
- ・世界規模のスポーツイベントの開催
- スポーツボランティアへの関心アップ

<仙台>

- ・市民参加型のスポーツコミッション発足
- ・文化観光局(2016年4月発足)の発足

主体的、献身的に活動するボランティアが
地域のスポーツ、そしてまちを共に創る時代に

これからの取り組み

地域連携	社会的な課題への取り組み(福祉健康分野) 地域スポーツ(総合型等)との連携 文化関連イベントとのつながり 宮城・東北と連携した活動	将来的には 公に活動 基盤の安定 した 地域及び 全国組織 が必要
人材育成	楽しみ方の多様化(交流と情報連携) リーダー・コーディネーターの育成 専門性や資質を活かした活動の広がり 負担なく体験できるシステム作り	

資料: izumita@dm.mhn.or.jp までお気軽に

小出 利一 氏 （新町スポーツクラブ 理事長）

私どもの新町スポーツクラブは、スポーツ少年団を核として作るということで平成9年から始めたのですが、当時は何をつくってどういう組織にしたらよいかわかりませんでした。スポーツボランティアについてはスポーツ少年団の人材育成システムを活用してつくったユースボランティアという組織がありました。クラブの活動理念の中に、国際・国内交流を通じて自分の地域を好きになり、地域に役立ってほしいというのがあります。小さいときからクラブに携わって、大きくなったらお金も出すということを含めてクラブを支えるサイクルがうまくまわってほしいと思っています。小学生・中学生時代からクラブで活動し、高校生・大学生になったらなるべくクラブ運営に携わるという方向性を打ち出しています。こうしたユースボランティアの人たちが、後にクラブの運営者・指導者になってクラブを発展させてほしいと期待しています。



平成9年にできた時は、新町の子どもたちの団体だけでつながっていましたが、その時からユースボランティア部門というのがありました。スポーツ少年団というのは東京オリンピックの2年前に当時のオリンピックのレガシーとして作ったものです。当初は日本オリンピック少年団という名前でした。手本になったのはドイツスポーツユーゲントというドイツのスポーツクラブの中にある青少年団体で、大島鎌吉という方が心血注いで当時の首相に直談判してつくったのがスポーツ少年団でした。少年団の理念は哲理委員会という哲学的な委員会から生まれていて、団員は綱領に則って運営しています。

昭和48年の全国スポーツ少年大会の写真を見ると、その時の制服はオリンピックの時の国旗掲揚とか式典用の制服を着ています。当時の国体の式典はその制服を着たスポーツ少年団の中学生・高校生がやっていました。私は今57歳ですが、小学生の時から今まで1回も少年団を抜けたことがありません。小・中学生の時にはジュニアリーダースクールという交流だけをする大会があり、高校生大学生の時にシニアリーダースクールというのがあります。4泊5日の集中講義と通信教育をして、シニアリーダーの資格をとります。これが終わると、日独同時交流という行事に参加することになります。シニアリーダーの資格があっても、20歳になると公認スポーツリーダーと少年団の指導員の資格をとることになっています。小学生の時からずっと活動していくと、20歳になって公認の指導者になれるということです。シニアリーダースクールというのは1968年からやっていますので、当時からこの流れに沿ってやってきました。実は、少年団もこれを活かしきれていないので、小学生が90%になっています。部活動で忙しいと言いつつ高校生で実際に部活動に入っているのが40%くらいで、だいたい帰宅部かアルバイトですから、こここのところでボランティアを養成したらいいのではないかと思います。

新町スポーツクラブが独自でやっている人材育成では小学生を中学生が、中学生を高校生がサポートし、大学生が小・中・高校生をサポートし、青少年を大人がサポートするという形で、全ての世代がボランティアとして活躍できるようになります。中学生の時に沖縄に行き交流するのですが、戦争について自分たちの命を守るには何をすべきなのかを考えることで、命の大切さを学びます。3泊4日なのですが、1日の終わりに感想文を書かせ、OKが出

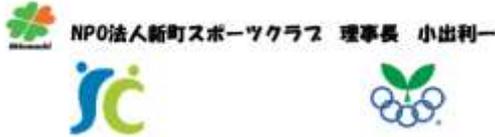
るまで寝かせません。遊びに行っているのではないということと、真剣に考え、聞いたことがちゃんと頭に残っているかということを確認する意味合いがあるからです。

さらに、新町はドイツ・ニュールンベルグ市のスポーツクラブを定期交流する協定を結んでいます。自主的に始めた寺子屋で、大学生が勝手に集まってきて教えています。大きな行事の時は、ユースボランティアが運営し大人はお金を出すだけです。ドイツとの青少年交流では相互にホームステイをします。今年も夏に来ます。時折トップアスリートに来ていただいてボランティアについて学ぶと自分たちだけではわからなかった気づきがあります。東北大震災の2年後には陸前高田の高校生と新町の中学生が交流したシンポジウムもユースボランティアの企画で実現しました。このように、地域で必要な人材を地域で育てようという取り組みをしています。

- 二宮：こういった活動はほとんどのクラブでしたくてもできないのが現状だと思います。他クラブをモデルとした具体例はありますか？
- 小出：昭和56年にドイツのスポーツクラブを訪問した際、20代前半の理事が複数名いて、会長クラスの人に対してガンガン意見している様子を目の当たりにしました。当時22歳だったので、自分もどんどん意見を言っているのだと思ったのと同時に、次を育てなければならぬという気持ちにもさせられました。

総合型地域スポーツクラブの地域的な役割と、それを支える人材育成の方法

スポーツ少年団を核にした総合型地域スポーツ団体の強みとは



NPO法人新町スポーツクラブの概要

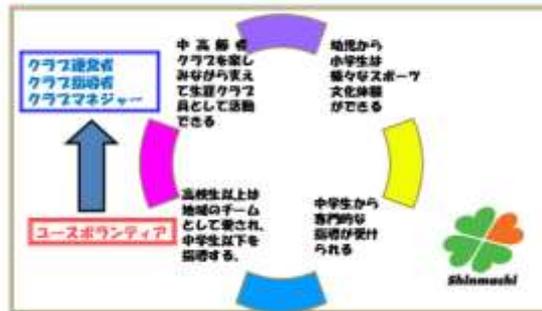
- 平成9年度から平成11年度 日本体育協会から総合型地域スポーツクラブ育成モデル地区指定を受けた。
- 平成12年11月23日、群馬県初の総合型地域スポーツクラブとして設立
- 現在、会員数 440名 年間予算 400万円
- 特徴は、スポーツ少年団を核にして設立したことから**日本スポーツ少年団人材育成システムを活用して人材を育成していること**

NPO法人新町スポーツクラブ活動理念

- ① 青少年の健全育成と子どもの体力向上
- ② いつまでも元気で活動的な中高齢者育成
- ③ 国際国内交流による地域愛の育成
- ④ 地域で育って地域で役立つ心がある人の育成



新町スポーツクラブライフサイクル



日本スポーツ少年団とは

知っているようで知られていない本質

スポーツ少年団はいつ誰が設立しようとしたのか？

1958年、オリンピックメダリストが、東京オリンピックを次世代の青少年達のために必要な遺産とは？ なんてであるのか？ 真剣に議論した結果、組織化されることになった。当初案の名称は「日本オリンピック少年団」だった。そして、少年世代が確立した後に成年世代も組織化するつもりだった。



この本とこの人を知っていますか？

オリンピックムーブメントとして、スポーツ少年団が必要と当時の岸首相に直談判した代表的な人



- | 団員綱領 | 指導者綱領 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • わたくしたちは、スポーツをとおして健康なからだところを養います • わたくしたちは、ルールを守り、他人に迷惑をかけない、りっぱな人間になります • わたくしたちは、スポーツによって、自分の力を伸ばす努力をします • わたくしたちは、スポーツのよろこびを学び、友情と協力を大切にします • わたくしたちは、スポーツをとおして世界中の友だちと力をあわせ、平和な世界をつくります | <ul style="list-style-type: none"> • わたくしたちは、次の時代を担う子どもたちの健全育成のために努力します • わたくしたちは、スポーツのもつ教育的役割を果たすために努力します • わたくしたちは、子どもたちのもつ無限の可能性を開発するために努力します • わたくしたちは、つねに愛情と英知をもって子どもたちと行動するよう努力します • わたくしたちは、スポーツを愛する仲間とともに世界の平和を築くために努力します |



このシステムをスポーツ少年団も活かしきれていない現実 だから

現在の日本スポーツ少年団団員構成が種目別・小学生90%の現状から資格を有している指導者もこのシステムを活かしきれていない

シニアリーダー修了者と2日間だけの研修と試験でスポーツリーダー・認定員になる人では、全くレベルが違う指導者になっている現実もある

 +  **お互いがお互いを良く理解することが大切**

総合型地域スポーツクラブもこの人材育成システムを活用することでスポーツ少年団も活性化できる

 **NPO法人新町スポーツクラブ
独自の人材育成プログラム**

全ての世代がボランティアとして活躍できる

- ★ 幼児を小学生がサポート
- ★ 小学生を中学生がサポート
- ★ 中学生を高校生がサポート
- ★ 高校生を大学生がサポート
- ★ 青少年の活動を大人がサポート

中学生は、沖縄で命の大切さを学ぶ
高校生以上は、ドイツ交流で地元の良さを学ぶ

 **自主的に始まったクラブの寺子屋**

中学生には高校生。高校生には大学生が教えています。

**NPO法人新町スポーツクラブ
ユースボランティア**

新町の事業は、ユースボランティアが企画運営しています。群馬県の大々イベントも、新町の多くのユースボランティアが活躍しています。

**14回目の沖縄クラブ間交流
ここで中学生は生きることの大切さを学ぶ**



第6回ドイツ ニュルンベルク市と 国際交流受入事業



この事業には、たくさんのホストファミリーが1週間関わって、ドイツの青少年のお世話もしてくれます。この受入事業の企画運営も前編、新町から派遣されたユースボランティアが、たくさんの大人の応援に協力していただきながら実施しています。

新町はニュルンベルク市との青少年国際交流を 独自に始めて16年間継続しています 青少年が南ドイツで学ぶスポーツクラブ文化



高校生から大学生世代が日本の文化とドイツの文化を紹介しながらの交流

トップアスリートから学ぶ



テニスの佐藤直子さんやバレーボールのヨコセッターランドさんがコーチに来てくれる。スポーツ少年団だけで運営していた時には考えられない活動ができた。

地域の公益性のための事業 防災シンポジウムも開催



高校生の子育てボランティア 町民ラジオ体操会も



地域で必要な人材を育成



- ★ 地域愛があるから自然とボランティア活動している
- ★ 幼児から大人世代まで、青少年世代が交流することで自然と身に付く「コミュニケーションスキル」
- ★ 医師・看護師・教師等の人に間わる職業に就いているひとが多い
- ★ クラブで育ってクラブで活動している

地域から必要とされる活動を行うことが総合型地域スポーツクラブの質を高め、活動を継続できる

小上馬 広介 氏（鎌倉市生涯スポーツ普及実行委員）

私は皆さんと同じボランティアですが、鎌倉市生涯スポーツ普及委員という立場でもあります。私の所属する鎌倉市生涯スポーツ普及実行委員会は鎌倉市レクリエーション協会とスポーツ推進委員、教職員のOBたちが集まって立ち上げたもので、スポーツとは縁遠い一般の方が参加できるようなスポーツを普及させることを目的とした団体です。



私自身のスポーツボランティアとしての経歴をお話しますと、今年、21歳になる息子が1歳の時に鎌倉に転居してきたタイミングで自治会役員をやることになりました。役員になると、地域の市民運動会などを取りまとめなければならないのですが、その際に小道具等を趣味のDIYを活かして作ったところで目をつけられました。30歳そこそこの若者が地域に入ってきて活動する訳ですから周りからは目立つようで、次に体育指導員を勧められやることになりました。体育指導員は鎌倉市からの受託事業や地域の市民運動会運営、学校施設開放の管理等が主な活動でした。鎌倉市で開催される湘南オープンウォータースイミングの大会に体育指導員として動員され、消極的な形で参加をしましたが、そこで笹川スポーツ財団と出会い、東京マラソンのリーダー養成研修会に参加し、東京マラソンにボランティアとして参加するようになりました。東京マラソンでの出会いが、湘南国際マラソンや大阪マラソン等様々なボランティア活動に関わるきっかけとなり現在に至っています。また、体育指導委員の方から勧められ、現在の所属団体でもある鎌倉市の生涯スポーツ普及実行委員になりました。

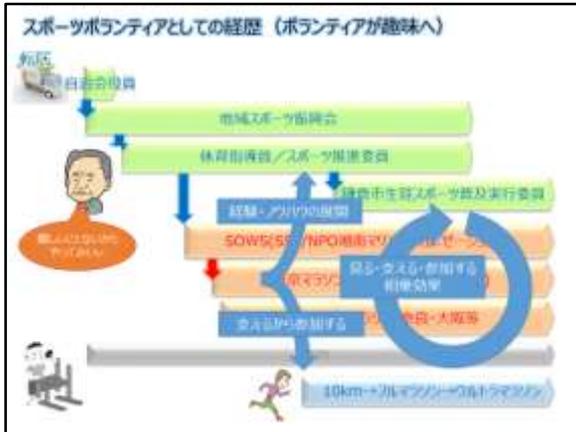
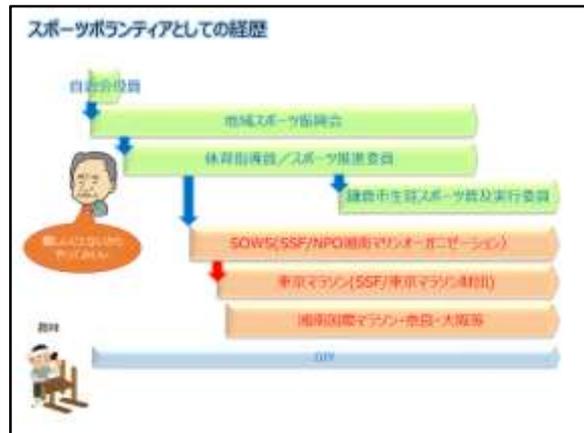
最初は依頼されて始めたボランティア活動でした。経験を積んでいくと活動にはノウハウが大事だということに気が付きました。地域の行事では運営の経験のノウハウは自分たちがマニュアル化していきます。東京マラソンのようなシステムチックに行われる大会でも、どういう風にしたらいいのかのというノウハウを纏めました。それは、地域でボランティアを引き受ける際にも役に立ちます。

その後、マラソン大会は支える側から参加する側、フルマラソンを経験するうちにボランティア仲間の誘いで飛騨高山のウルトラマラソンに参加するようになりました。スポーツボランティアで支える側からランナーとして参加する側に回ると、今度は参加者の目線で支える側を見ることができると、「見る、支える、参加する」という観点で相乗効果が生まれてきます。ランニングの経験を活かし横浜マラソンのコースを下見するバスツアーの案内役としてコースの特徴を紹介させてもらったりしています。

ボランティアだけでなくランニング仲間との交流も広がり、とうとう去年は海外まで行って走りました。海外へ行ってもボランティアの活動は気になりました。海外では日本のボランティアと違い結構アウトだと感じました。でも、ランナー目線で走ってみて問題無いと感じました。日本はあまりにシステムチックに硬く感じるのも、もっとラフにやってもいいのではないかと感じました。

私のスポーツボランティアライフを振り返ってみますと、いろんな方と交わり、仲間と楽しみ、多様なスキルや経験をもっている仲間から刺激を受けることによって学び、自ら成長し続けることができたと思います。ただし、忘れないでください。家族も仕事も大事です。小言を言われるようになったら活動が出来なくなってしまうので、無理をせず、家族に感謝し、仲間感謝する、というのが私のボランティアライフのモットーです。

- 二宮:これまでご自身が参加された大会で、魅力的あるいは理想的な大会がありましたら教えてください。
- 小上馬:見ていてボランティアが楽しそうだったのは、飛騨高山と霞ヶ浦。霞ヶ浦では、地元の皆さんがご自身で作ったものを庭先で提供していました。生活の延長線上にあるボランティアは楽しいのではないかと思います。



私のスポーツボランティアライフ

仲間と楽しみ
仲間から刺激を受け
仲間から学び自ら成長する

家庭も仕事も大事
無理をしない
家族に感謝し、仲間にも感謝する

②ディスカッション

○ 二宮

ここからは、3人のパネリストの方に共通するポイントを質問させていただいてお答えいただこうと思います。まず、スポーツボランティアの人材育成ということでお話いただきたいと思います。地方にいくと、フォーマルでなくほんわかとしたいい大会がある一方で、消滅してしまうイベントもあります。人材育成の観点でポイントとなること、あるいは方向性について教えていただければと思います。



● 泉田

大きなテーマは後継者ですね。組織として活動していく以上、次にバトンタッチする人をつくる必要があります。スポーツボランティアに楽しみを求めてきている人が多い中で、その次の段階を作っていくのも大事です。ボランティアも一つのイベントの最初から最後まで関わることができるのは多くないと思います。仙台の場合そのような関わり方ができるので、やる気のある人に最初から最後まで関わっていただき、できるだけ多くの人に経験してもらいたいと思っています。今後に思いがある人たちのつながりの中で、人が学び育つような環境を作っていければいいのではないかと思います。

● 小出

私たちのクラブのメインは中・高・大学生たちで、たくさんの人と会話をすることによって社会人になる前のトレーニングができているためか、社会に出てからいろんな職種についています。人と接するのが好きというのは大きな武器です。地方の悩みは、大学に行くときに都会に人材を吸い取られてしましますが、地元で育てその組織の良さを知っている人たちが後々地元に戻ってくれば継続していきます。浮き沈みはありますが、無理をせずにつなげていくことで若い世代を受け止められるし、地元のいろんな行事ができるのですから。

● 小上馬

新しいボランティアが入ってきたときに「先人の知恵」を活用できるように、ノウハウをマニュアル化することが大切です。また、主催側のビジョンが明確であることも必要で、ボランティア自身が楽しみながら、参加する人たちを楽しませたい、そういう価値観が参加するボランティアと共有されるようになると、それを支える人たちが集まってきます。また、地域活動では人集めが大変な場合、人材の刷新をはかって権限を委譲していきます。新しい人、新しい知恵、考え方をに入れていかないと地域も大会ボランティアも活性化しません。

○ 二宮

本日のサミットには「大規模スポーツイベント開催決定を機に自らの地域における活動を見直す」という副題がついています。2019年のラグビーワールドカップや2020年東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、総合型地域スポーツクラブがきちんと認識され運営されて、そこに携わった人たちがなんらかの形で大規模スポーツイベントに引き続き関わっていくというのが重要ではないでしょうか。総合型地域スポーツクラブと日本のスポーツボランティアの連携は今後どのようにすれば可能になっていくのか、その接続点について具体的に事例等があればお話いただければと思います。



● 泉田

SV2004では、これまではスポーツイベントを支える事が中心でしたが、活動している人たちはイベントが終われば地域の中に戻っていきます。地域に総合型スポーツクラブがあるのが当たり前の時代になってきたので、なんとかそこの接点をつくっていきたいと考え、ちょうど意見交換をはじめたところです。大規模スポーツイベントに関わった人たちが、地域のスポーツを盛り上げ、役立つ存在になっていければと考えています。

● 小出

大規模イベントにクラブが関わるということになると、会員のモチベーションは間違いなく上がります。問題は、どういう関わり方ができるか、ということです。2020年東京オリンピック・パラリンピックの時は宿泊が問題になると思いますので、クラブとつながりのあるドイツから応援に来るなら、新町で受け入れを誘致しようかと考えています。それぞれ勝手に応援するところを決めてやってもいいのではないのでしょうか。キャンプ地として暑い群馬に来てくださいとはとても言えませんが、選手だけでなくいろんな人が来るわけですから、温泉に来てもらうこともできます。大規模イベントについては、やれることは沢山あるので、自分たちの地域の特徴を活かしてやれることをやれる範囲でと考えています。



● 小上馬

鎌倉市には総合型スポーツクラブは1団体ありますがあまり知名度がなく、スポーツ推進委員でも検討している段階です。振興策としては、地域に大型イベントが来れば元気やパワーがもらえると思います。オリンピックの選手の人たちに来ていただければ鎌倉には鎌倉なりに見せ場がいろいろありますし、お隣の藤沢市はオリンピックのヨット会場になっているので、東京オリンピック・パラリンピックが地域推進のきっかけになると思います。

○コーディネーター 二宮 まとめ

2020年の開催が決まって東京を中心にスポーツボランティアとして関わりたいという人の数が増えているのは事実ですが、一番重要なのは、祭りが終わった後に何が遺されたのかということです。何万人のボランティアが関わったが、その人たちがその後どこに行ったのか分からないというような状況は作ってはならないと思います。総合型地域スポーツクラブが、そこに関わっていくための一つのメディアの役割を果たすのではないかと考えて、ディスカッションの一つのテーマとさせていただきました。

今年は、「地域で活動するスポーツボランティアの重要性」ということで、コミュニティに即した活動を中心に取り上げて、地域で実践をしておられるパネリストの方々とディスカッションをして参りました。これからもいろいろなテーマでこのサミットを実施して参ります。是非参加していただいて、スポーツボランティアに関する見識や楽しみを共有していただければと思いますので、よろしくお願いいたします。本日は、どうもありがとうございました。

(5) 総括(要旨)

宇佐美 彰朗 (日本スポーツボランティアネットワーク 理事)

本日は「スポーツボランティアサミット 2015」にご参加いただきましてありがとうございます。いよいよ、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。1964年に開催された東京オリンピックでは、競技場などのハードウェアがレガシーとして遺り50年を経過した今でも使われ続け、スポーツの大衆化、多様化に貢献しました。今サミットのテーマは2020年東京大会のレガシーはソフトであるとの認識の元、地域のスポーツボランティアとその活動に注目しました。



本日も登壇いただきました小谷実可子様からは、ご自身の現役時代そしてスポーツコメンテーターとしての経験から、スポーツボランティアの質が大会の印象を左右し大会成功の大きな要素であるとお話しいただき、質の高いスポーツボランティアの養成に取り組む日本スポーツボランティアネットワークの重要性を再認識致したところです。

由良英雄様からは、スポーツ庁創設の経緯や多岐に亘るスポーツ行政に取り組む組織体系に関するお話、そしてスポーツボランティアの‘支えるスポーツ’活動にも着目し、生涯にわたりスポーツに親しむことができる環境を整えるなど、民間と地域の力をどのように生かすのか、スポーツ庁の今後に期待がふくらみ、頼もしさを感じる内容でした。

そしてパネルディスカッションでは、スポーツボランティアをそれぞれの地域で実践し、地元根付いた活動をしておられる泉田和雄様、小出利一様、小上馬広介様からはそれぞれの分野での現状と課題、今後の展望などをお話しいただきました。この3氏に共通することは、「持続性と積み重ね」であり、それは結果として生活の中にスポーツボランティアがあることになるのではないのでしょうか。ボランティアはスポーツのトレーニングと一緒になんだなと感じました。10年20年という長い年月の努力の積み重ねは、まるでスポーツ現場でのトレーニングに匹敵する捉え方、考え方と見紛うばかりで聞き入ってしまいました。

スポーツボランティア活動を一つのレガシーとして定着させ、生活の中で生きた生涯スポーツの一環を担う活動とするには2020年の東京オリンピック・パラリンピックはまたとない機会です。日本スポーツボランティアネットワークは、皆さんとともに歩みながら、より一層発展すべく頑張りたいと思います。本日は本当にお忙しい中、足を運んでいただきましてありがとうございました。

スポーツボランティアサミット 2015 報告書

特定非営利活動法人日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-6011

東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 11 階公益財団法人笹川スポーツ財団内

電話:03-5545-3301 FAX:03-5545-3305

<http://www.jsvn.or.jp/> E-mail: info@jsvn.or.jp
